

鐘の音の持つ意味

佐伯茂樹

6月の読響公演では、5日の《定期演奏会》でマーラーの交響曲第3番、24日の《読響メトロポリタン・シリーズ》と25日の《大阪定期演奏会》ではベルリオーズの〈幻想交響曲〉と、19世紀の始まりと終わりを象徴する2つの交響曲が取り上げられ、どちらも曲の中で「鐘」が登場するという共通点がある。だが、同じ鐘でも、マーラーの交響曲第3番とベルリオーズの〈幻想交響曲〉では、音色がまったく違い、使われ方も対照的である。そこで、ここでは、キリスト教文化圏において鐘がどのような役割を果たしてきたかをたどることで、ベルリオーズやマーラーがどのような概念で鐘を使用し、当時の聴衆たちがどのようにそれを聴いたのか検証していくことにしよう。

西洋文化圏における 鐘の発展

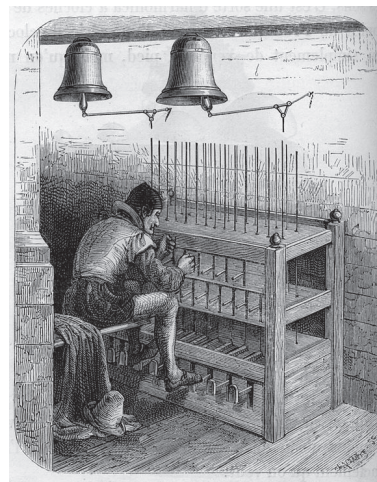
鐘の歴史は古い。中国では、紀元前1000年以前の時代から青銅製の梵鐘^{ぼんしょう}が造られており、宗教行事や戦争の合図に使われていたという。ヨーロッパでも、古代エジプトや古代ローマ時代には鐘に相当するものが存在しており、紀元313年、ミラノの勅令が發布され、キリスト教が公認されたことで、各地の教会に設置されるようになったようだ。

キリスト教が絶大な権力を握るようになると、町の中心に教会が建設され、町を一望できる塔の上に鐘が設置

される。人々は、この鐘の合図によって時刻や火事など緊急事態の知らせを受けていたのである。この点に関しては、日本の寺院の鐘も同じであるが、西欧では中世の終わりごろになると、鐘の音高を調律する技術が開発され、複数の鐘を組み合わせることでメロディを奏でられるようになった。最初は手動であったが、時計の機構と組み合わせることで、時刻を正確に知らせることが可能になり、ロンドンのウェストミンスター宮殿の一角にあるビッグベンが正午の合図で鳴らすメロディ（日本でも学校のチャイムに採用され親しまれている）のように、市民の生活に浸透していったのである。



ビッグベン



カリヨン奏者

ちなみに、音高の異なる複数の鐘を並べて鍵盤で演奏する「カリヨン」は、鐘を金属棒に変更することで小型化した「鍵盤グロッケンシュピール」へと発展。モーツァルトのジグシュピール〈魔笛〉などで使用されたが、19世紀に入ると、金属板を硬いバチで叩く鉄琴型のグロッケンシュピールになっ

て今日に至っている。

市民生活の合図として 機能した鐘

中世以降のヨーロッパの人々にとって、鐘は時刻を知る重要なアイテムになったわけだが、そのような概念は、クラシック音楽の名曲の中にしばしば発見することが可能だ。ムソルグスキー／リムスキー＝コルサコフ編の交響詩〈禿山の一夜〉の夜明けの場面では、鐘が6回鳴ることで朝を迎えたことを示しているし、その逆に、リヒャルト・シュトラウスの交響詩〈ツァラトゥストラはかく語りき〉の“夢遊病者の歌”では、12回鐘が鳴ることで深夜になったことを表している。

鐘が知らせたのは時刻だけではない。町の中心にあった教会の鐘は、冠婚葬祭など市民の生活の中の行事の合図にも使われた。市民の祝い事で音高の異なる複数の鐘を一斉に打ち鳴らすさまは、現在でも結婚式でおなじみである。チャイコフスキーの序曲〈1812年〉では、ナポレオン軍に勝利したロシアの人々の喜びを表すために、実際に、鐘と祝砲が効果音として導入されているが、戦争で勝利したり、他民族による弾圧から解放されたりしたときなどは、さぞかし盛大に打ち鳴らされたに違いない。実際の鐘ではなくチュ

ープラーベルで代用されることが多いが、ムソルグスキー／ラヴェル編の組曲〈展覧会の絵〉終曲“キエフの大門”や、いくつかのマーラーの交響曲で聴こえる鐘の音も、やはりそのような光景を意識して描いたのだろう。

今回演奏されるマーラーの交響曲第3番でも、第5楽章で鐘が登場するが、こちらは祝祭の効果音としてランダムに打ち鳴らされるようなものではなく、はっきりとした音高を持つメロディ楽器として使われている。この楽章は、詩集『少年の不思議な角笛』の“3人の天使が歌った”に基づいた歌詞をアルト独唱が歌うもので、その効果音として、児童合唱が鐘の音を模して歌う「ビム・バム」という歌声と共に鐘が鳴らされるのだ。その響きは、グロッケンシュピールのように澄んでおり、まさに天使のような無垢な響きの世界が形成される。音高がはっきりしていて、その並び方が音楽として使われているという点では、鐘が動機を奏するワーグナーの舞台神聖祝典劇〈パルジファル〉と似ていると言ってもいいかもしれない。

吊いの合図としての鐘

教会の鐘を管弦楽の楽器として用いた最初の作品は、ベルリオーズの〈幻

想交響曲〉であろう。当時の聴衆は、コンサートホールで教会の鐘が聴こえてきて度肝を抜かれたに違いない。〈幻想交響曲〉の鐘は、C（ハ音＝ド）とG（ト音＝ソ）の2つの低い音高が指定されており、明らかに祝祭の鐘とは性格が異なる。鐘が登場する第5楽章は、作曲家自身の解説によれば、恋人を殺害した罪で処刑された主人公が魔女の饗宴^{きょうえん}で自身の葬儀を見ろという内容であり、バスン（ファゴット）とオフィクレイド（現在はチューバで代奏）がグロテスクな音色でグレゴリオ聖歌〈怒りの日〉を奏する背後で鐘が鳴らされるのだ。

この曲が作曲された当時のノートルダム大聖堂の儀式の様子を描いたイギリスの水彩画家チャールズ・ワイルド（1781～1835）の「ノートルダム大聖堂の聖歌隊」を見ると、両サイドに分かれた聖歌隊の前方にセルパン奏者が描かれており、ベルリオーズが自著『管弦楽法』に記した記述によれば、当時、セルパンは、フランスの教会で〈怒りの日〉が歌われるときに補助として演奏されたらしく、この絵はおそ



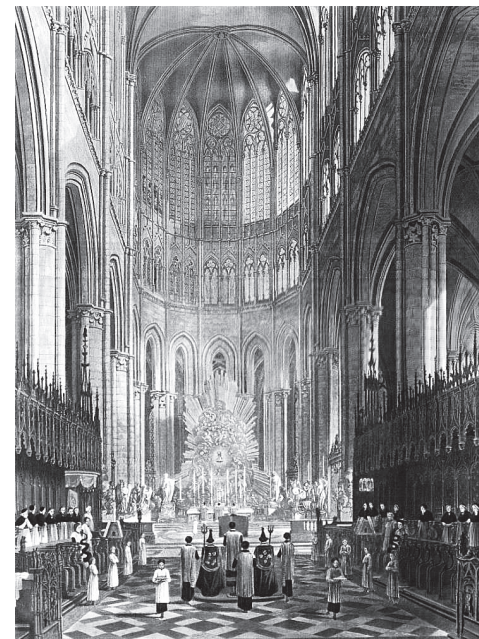
オフィクレイド

らくその場面を描いたのであろう。〈幻想交響曲〉を聴いた当時の聴衆は、セルパンに似た音がする2本のオフィクレイドと鐘の音を聴いて、この場面を連想したに違いない。

ここで鳴らされる鐘は、葬儀の知らせとして用いられる吊いの鐘であることは間違いないが、現在、一般に、〈幻想交響曲〉で用意される鐘は、倍音成分の問題なのか、見かけの大きさの割には甲高い音がするものが少なくなく、吊いの鐘のイメージどおりの暗く重い響きに出会うことは稀である。ベルリオーズ自身、低い音の鐘が調達できなければ複数のピアノで代用する方が好ましいと記しており、鐘の音よりもさらに1オクターヴ下と2オクターヴ下の音を鳴らすように要求しているのだ（ベルギーの指揮者ヨス・ファン・インマゼールは、ベルリオーズが望んだ低い音の鐘を用意するのは物理的に不可能だとして、ピアノ



セルパン



チャールズ・ワイルド「ノートルダム大聖堂の聖歌隊」
提供：ダグラス・ヨー

で代奏させてレコーディングをしている）。

しかしながら、管弦楽法に^た長けたベルリオーズが指定しているのだから、実際に低い音がする鐘は存在したはずだ。興味深いことに、19世紀の小説を読むと、吊いの鐘が鳴らされる時には、鐘を打つ舌の部分に黒い布を被せて鳴らしていたという記述を見出すことができる。打楽器に黒い布を被せて暗い音にすることで吊いの表現をする習慣は、バロック以前から存在していたので、もしかしたら、鐘にも同様の処置を施していた可能性も考えられなくはないだろう。

（さえき しげき・音楽ライター／古楽器奏者）

◎首席ホルン奏者

日橋辰朗

Tatsuo Nippashi

音色の魅力

マーラーにはふんだんに。

「今年4月から読響の団員になった。
27歳。昭和最後の世代だ」

読売日本交響楽団は学生の時からずっと憧れていましたので、ここでホルンを吹けるというのは幸せですね。嬉しい気持ちと同時に、素晴らしいオーケストラだからこそ、首席ホルンとしての責任を感じています。

実は、学生時代にエキストラとして読響に出演した時の曲目が、6月の演目の一つでもあるベルリオーズの〈幻想交響曲〉でした。僕は3番ホルンで目立つソロがあったのですが、緊張してしまい全然思い通りに吹けなかった。「お前ちゃんとさらってこいよ」と叱られたのを覚えています（笑）。

「日橋さんは東京生まれの東京育ち。中学から吹奏楽部でホルンを始めた。東京音楽大学に入学。大学4年で日本管打楽器コンクール1位、卒業後は日本音楽コンクールのホルン部門で優勝するなど、受賞歴は輝かしい。2013年4月に日本フィルハーモニ



「交響楽団に入団した」

中学の吹奏楽部で本当はトランペットを吹きたかったのですが、人気があったのでホルンに回されました。が、すぐにホルンが楽しくなり、ホルンを続けるために吹奏楽が盛んな高校を選択、音楽の教師になろうというくらいの気持ちで東京音大に進みました。一つの転機は入学後、ホルンの奏法を思い切って変えたことです。4か月ほどはまったく音が出なくなり、必死でした。周りの友達や先輩は皆上手に吹いていたので焦りました。当時は朝7時半から夜9時まで毎日練習していました。

大学では、水野信行先生に出会ったことがとても大きいです。ドイツのバ

ンベルク交響楽団で首席ホルンを24年間務めた素晴らしい方です。何と言っても、音色そのものが魅力だと思います。響きがとても多く、柔らかくて歌うようで、一瞬でホールの雰囲気を変えてしまう。あのような音を出せるホルン奏者は他にはいない。僕は水野先生には本当に大切に育てていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

大学2年のある朝、プロのオーケストラからメールで「エキストラに来ませんか」とお誘いがあった。これは夢かな、と。その後、何回かエキストラを経験し、プロを目指すようになりました。教職課程をとっていましたが、全部やめて。一つのことをやりはじめると、僕はそれしかできないタイプなんです。《ホルンはオーケストラの中で、とくに難しい楽器だと言われますが》

シューマンが「ホルンはオーケストラの魂だ」と語ったそうです。ホルンがダメなオーケストラはダメなんだ、と。音域が広く、さまざまな音色を出せますが、コントロールが難しくて音も外れやすいのです。でも僕はそれを聴衆に難しいと感じさせたくないと考えています。それが一番難しいのですが（笑）。楽器を演奏するというよりも“音楽”をしたいですね。

ホルンはそもそも狩りの際、馬に乗りながら「獲物がいたぞ」と後ろの人に合図するための楽器でした。それで

ベルが後ろを向いている。トランペットのような直線的な音とは違って音が後ろに出るので、音色がまろやかになり、その音色を作曲家が求めるようになったのでしょう。それだけにホルンの形状で吹き方も変わります。音程や音色もそうですが、音量のバランスをものすごく意識しますね。

《6月は、ベルリオーズの〈幻想交響曲〉以外にも、マーラーの交響曲第3番やドヴォルザークの〈新世界から〉にも出演しますね》

マーラーの3番は初めてです。他のマーラーの交響曲は全部演奏しました。マーラーは、最初から最後までホルンのソロがたくさんあります。わびしい音楽のあとに実に美しいソロの旋律が出てきたりするので、ホルンの使い方がとても上手だと思います。力強く金属的に鳴らす一方で、柔らかく、美しいメロディーも随所にあります。弦楽器や木管楽器とも調和する。そんなホルンの魅力が、マーラーの曲ではふんだんに表現されています。

ユージ・テミルカーノフさんの指揮も楽しみです。学生の頃、読響のエキストラで出会いましたが、なんて素晴らしい指揮者なのだろうと思いました。指揮に無駄がなく、必要なことだけなのに音楽の内容は本当に素晴らしい。読響の音を十分引き出してくれるのでは、と思います。

フランスの鬼才が、古典と現代作品へ鮮烈に挑戦

7/1 (水) 19:00 第550回 定期演奏会
サントリーホール

ブルーーズ：〈ノタシオン〉から1番、7番、4番、3番、2番
ベルク：ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉
ハイドン：〈十字架上のキリストの最後の7つの言葉〉(管弦楽版)
指揮：フランソワ＝グザヴィエ・ロト ヴァイオリン：郷古 廉



©Marco Borggreve
フランソワ＝
グザヴィエ・ロト

見果てぬ宇宙への夢と憧れを〈惑星〉の名旋律が運ぶ

7/24 (金) 19:00 第2回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

7/25 (土) 14:00 第81回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ブラームス：ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲
ホルスト：組曲〈惑星〉
指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス
ヴァイオリン：ダニエル・ゲーデ(読響コンサートマスター)
チェロ：グスタフ・リヴィニウス 児童合唱：東京少年少女合唱隊



©R. Winkler
デニス・ラッセル・
デイヴィス

“カリスマ”上岡敏之が繰り広げる、究極のアンサンブル

7/26 (日) 14:30 第6回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※14:00から解説

《上岡敏之×読響の室内楽》
モーツァルト：ピアノ四重奏曲 第1番
ブラームス：ピアノ五重奏曲
ピアノ：上岡敏之 ヴァイオリン：山田友子、赤池瑞枝
ヴィオラ：長岡晶子 チェロ：松葉春樹



©読響
上岡敏之

欧州音楽界を席卷する新鋭が、待望の日本デビュー

7/29 (水) 19:00 第584回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

メンデルスゾーン：付随音楽〈真夏の夜の夢〉序曲、
ヴァイオリン協奏曲、交響曲 第4番〈イタリア〉
指揮：ジェレミー・ローレル ヴァイオリン：ヴェロニカ・エーベルレ



©Yannick Coupanne
ジェレミー・ローレル

7月 公演の聴きどころ

7月の公演では、まず1日の《定期演奏会》に、世界各地で評価を高めるフランスの鬼才ロトが、6月に続いて登場する。ピリオド楽団「レ・シエクル」の活動で脚光を浴び、カンブルランの後任でSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者としても活躍するロト。現代の楽器を用いるオーケストラへの客演でも、古楽器奏法を持ち込んだ斬新な響きを引き出すなど、意欲的なアプローチで評判を呼んでいる。《定期演奏会》では、古典派の大家ハイドンの傑作〈十字架上のキリストの最後の7つの言葉〉(管弦楽版)と現代音楽の大家ブルーーズの〈ノタシオン〉を組み合わせた意欲的なプログラムを披露。ウィーンで学ぶ期待の新鋭・郷古廉が初めて挑む、ベルクのヴァイオリン協奏曲にもご注目を。ストラディヴァリウスで奏でられる美しい音色に期待がふくらむ。

24、25日には、リンツ・ブルックナー管の音楽監督を務める名匠D・R・デイヴィスが2013年以来、2度目の登場を果たす。ヒット曲の“ジュピター”でも人気を博すホルストの代表作〈惑星〉を指揮して、7つの星を巡る音絵巻を壮大に描き上げる。歯切れよいリズムと鮮やかな音色で聴衆を別世界へと誘うだろう。甘美な旋律が魅力のブラームスの二重協奏曲では、元ウィーン・フィルのコンサートマスターで、現在は読響のコンサートマスターを務める名手ゲーデが、チャイコフスキー国際コンクールの覇者となったチェリスト、リヴィニウスと共演。世界を股にかけて活躍する二人が、丁々発止の掛け合いで魅了してくれる。

29日には、ザルツブルク音楽祭、ウィーン国立歌劇場などに次々とデビューし欧州で躍進を続ける新星ローレルが待望の初来日。来日前にはフランスのエクサン・プロヴァンス音楽祭で〈後宮からの誘拐^{ゆうかい}〉を振るなど、世界的な注目を浴びている。爽快感あふれるリズムが人気の交響曲〈イタリア〉などメンデルスゾーンの傑作3曲を指揮し、鮮烈な日本デビューを飾る。ヴァイオリン協奏曲では、ドイツの深い伝統を受け継ぐ若き実力派エーベルレが共演。ラトル指揮ベルリン・フィル、ロンドン響とのデビューを果たすなど、続々と世界の大舞台へ進出しているフレッシュな才能の華麗な独奏も聴き逃さない。

(文責：事務局)

ボストン響などで活躍する俊英が振る《三大交響曲》

8/16 (日) 14:00 第3回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

8/17 (月) 18:30 読響サマーフェスティバル2015《三大交響曲》
東京芸術劇場

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉
指揮：ケン＝デイヴィッド・マズア



©Beth Ross-Buckley
ケン＝デイヴィッド・マズア

若手人気ソリスト3人が、《三大協奏曲》で競演

8/21 (金) 18:30 読響サマーフェスティバル2015《三大協奏曲》
東京芸術劇場

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番
指揮：下野竜也
ヴァイオリン：服部百音 チェロ：アンドレアス・ブランテリド
ピアノ：HJリム



下野竜也

首席客演指揮者・下野が振る得意のドヴォルザーク

8/23 (日) 14:00 第179回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲、交響曲 第8番
指揮：下野竜也
チェロ：アンドレアス・ブランテリド



下野竜也

古典派に精通した名匠・鈴木秀美が、待望の初登場

8/27 (木) 20:00 第11回 読響カレッジ 文京シビックホール
※19:30から解説

ベートーヴェン：交響曲 第3番〈英雄〉
指揮：鈴木秀美
ナビゲーター：七尾藍佳 ※今回のみ、都合によりナビゲーターが変更となりました。



鈴木秀美

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00～18:00/年中無休)
ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

ワーグナーの大作に初演150周年を記念して挑戦

9/6 (日) 15:00 第551回 定期演奏会
サントリーホール

9/13 (日) 15:00 第585回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

ワーグナー：楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉(全3幕/演奏会形式・字幕付き)
指揮：シルヴァン・カンブルラン
独唱：エリン・ケイヴス(トリスタン)、クリスティアーネ・イーヴ
エン(イゾルデ)、アッティラ・ユン(マルケ)、クラウディア・マ
ーンケ(ブランゲーネ)、石野繁生(クルヴェナル)、アンドレ・モ
ルシュ(メロート)、与儀 巧(牧童、舵手、若い水夫)
男声合唱：新国立劇場合唱団



シルヴァン・カンブルラン

カンブルランとジャズの鬼才・小曾根真が注目の初共演！

9/11 (金) 19:00 第18回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場

ムソルグスキー：交響詩〈はげ山の一夜〉(原典版)
ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲
ムソルグスキー(ラヴェル編)：組曲〈展覧会の絵〉
指揮：シルヴァン・カンブルラン ピアノ：小曾根 真



シルヴァン・カンブルラン

501席の小さなホールで贅沢に楽しむ《ハイドンの名曲選》

9/16 (水) 19:30 第7回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《下野竜也のハイドン》
ハイドン：王立音楽家協会のための行進曲、チェロ協奏曲 第1番
交響曲 第101番〈時計〉
指揮：下野竜也 チェロ：上村文乃 ※当初出演を予定していた遠藤真理は、出演できなくなりました。



下野竜也

名匠・尾高が練達のタクトを振り、国際派・諏訪内が共演

9/20 (日) 14:00 第180回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場

9/21 (月) 14:00 第82回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

リヤードフ：魔法にかけられた湖
モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲 第5番〈トルコ風〉
チャイコフスキー：交響曲 第4番
指揮：尾高忠明 ヴァイオリン：諏訪内晶子



尾高忠明

読響×アプリコ クラシック二大傑作選〈皇帝〉&〈新世界〉

■6/20 (土) 15:00 大田区民ホール・アプリコ 大ホール

指揮：石川星太郎 ピアノ：仲道郁代

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉

ドヴォルザーク／交響曲 第9番〈新世界から〉

[お問い合わせ]

大田区民ホール・アプリコ 03-5744-1600

読響×夏のベートーヴェン! ～二大傑作〈皇帝〉&〈運命〉～

■7/4 (土) 15:00 かつしかシンフォニーヒルズ モーツァルトホール

指揮：園田隆一郎 ピアノ：アンティ・シーララ

メンデルスゾーン／付随音楽〈真夏の夜の夢〉序曲

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉、交響曲 第5番〈運命〉

[お問い合わせ]

かつしかシンフォニーヒルズ 03-5670-2233

リンツ州立劇場との共同制作公演 東京二期会オペラ劇場〈魔笛〉

■7/16 (木) 18:30、18 (土)～20 (月・祝) 14:00 東京文化会館

指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス 演出：宮本亜門

出演：妻屋秀和、鈴木准、森谷真理、幸田浩子 ほか (16日・19日)

大塚博章、金山京介、高橋維、嘉目真木子 ほか (18日・20日)

合唱：二期会合唱団

モーツァルト／歌劇〈魔笛〉全2幕 (日本語字幕付き原語上演)

[お問い合わせ]

二期会チケットセンター 03-3796-1831

フェスタサマーミュージザ KAWASAKI 2015

■7/30 (木) 15:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：ジェレミー・ローレル ヴァイオリン：ヴェロニカ・エーベルレ

《オール・メンデルスゾーン・プログラム》

付随音楽〈真夏の夜の夢〉序曲、ヴァイオリン協奏曲、交響曲第4番〈イタリア〉

[お問い合わせ]

ミューザ川崎シンフォニーホール 044-520-0200